

## 9. 建築物

### 9-2. 家の建て方

#### 9-2-1. 建築

私の家は、桎の家だった。他の家はほとんどヨシの家だった。

[相川コト氏]

### 9-3. 家屋の内部構造

#### 9-3-1. 屋内とその配置

(以下の家屋の構造についての聞き書きは、鵜苫(ウトマ)の指導者といえるタカミ・ヨシジロウ氏の家についてである)(図13)

[山崎シゲ氏]

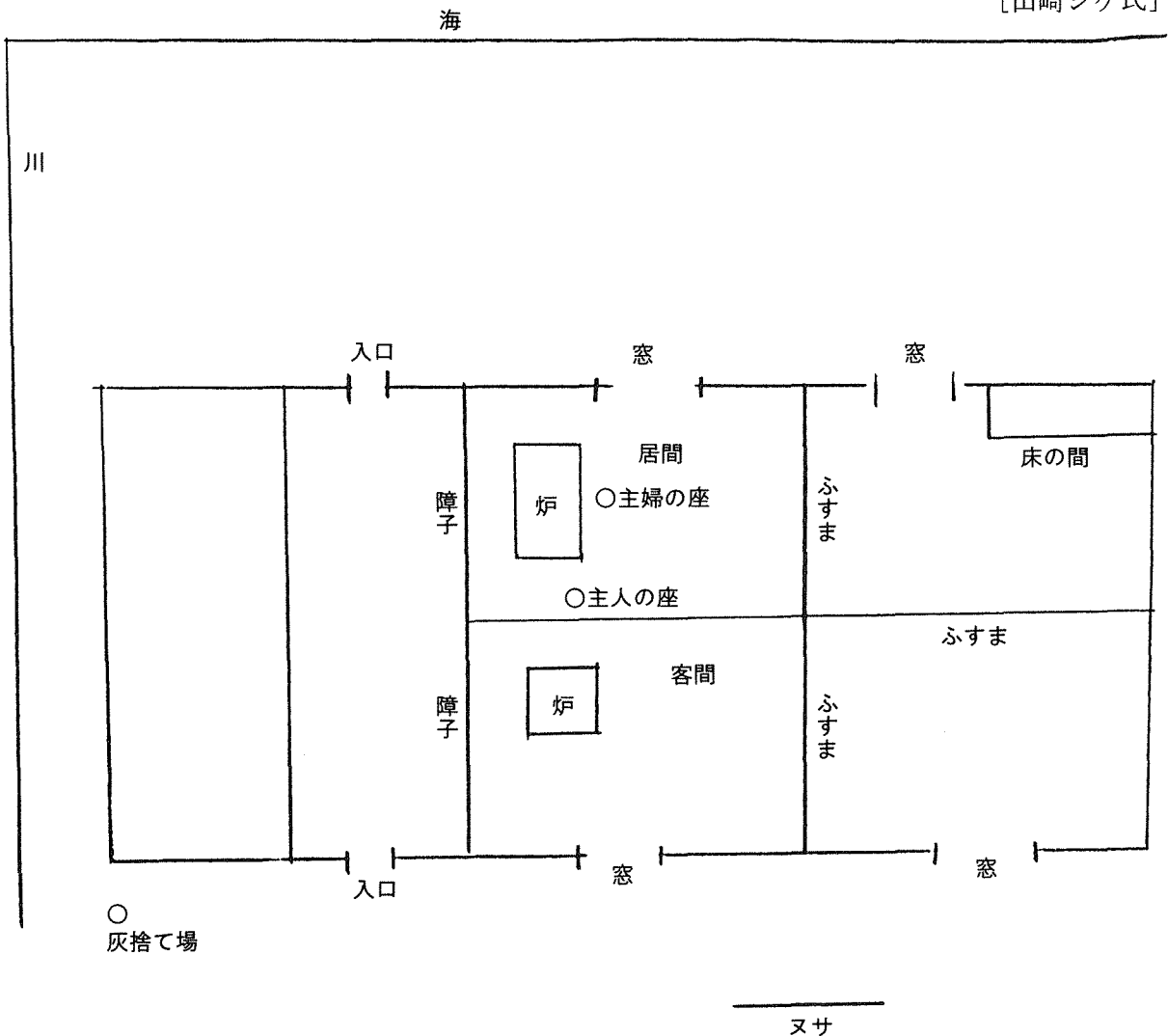


図13 類似の高見氏の家(概念図)

タカミ・ヨシジロウさんの家の山側の家から1間半ほど離れたところにヌサ場があった。

[山崎シゲ氏]

タカミ・ヨシジロウさんの家の「にわ」(土間)は、表と裏が通っていてその隅にお勝手があった。「にわ」と上がりの部屋の間は、障子で仕切られている。部屋は4つあってふすまで仕切られていたが、浜側の2つの部屋は12畳、山側の部屋は8畳の広いものであった。人が集ったとき、ふすまを全て取り外すと大広間になった。

[山崎シゲ氏]

居間には、「にわ」寄りに長四角に切った炉があった(にわと炉の間は座布団が敷ける程度あいていた)。いつも立派な鉄瓶が煮立っていた。炉の「横座」は山側の座であって主人が座る。ここが上座といえる。客は上がり口にすわる。女主人は客と向い合う座に座った。家の中でカムイノミ *kamuynomi* をするときは、この炉で行なった。

[山崎シゲ氏]

改まった客は居間の山側にある部屋に通した。ここには3尺4方ほどの小さな炉が切ってあった。桜の幅広の立派な炉縁(「ろんぶち」)であった。この炉ぶちに少しでも足をかけると火箸でたたかれた。「家の親父の頭をふんずけるのと同じこと」だからだ。この炉を使うときは、居間の炉からおきを運んだ。

[山崎シゲ氏]

炉は部屋の真ん中に作ってはいけないとウタリではいわれている。すこしずらしてつくる。

[山崎シゲ氏]

道路側(南側、浜側)の奥の南西に幅3、4尺の床の間があって、カムイエカシ *kamuy ekasi* の大きなイナウ(太さは3cmくらい)が置いてあった。ヤナギで作ったものだ。真ん中に孔のあいた厚い板の台があって、そこに差し立てた。カムイエカシは、毎年2月15日、カムイノミの際に新しく作り、1年中置いておく。古いカムイエカシはヌサにおさめる。床の間には、お膳があって、その上にトゥキ *tuki* (杯)とパスイ *pasuy* (奉酒箸)が3組ほど載せてあった。カムイノミのとき、一番先にオンネブ *onnep* (「親方」という意味だと思う)が取ってカムイノミして一口酒を飲んだら、他の人に酒の入ったトゥキを渡す。また、イナウの上部を搔く小刀と下部を搔く小刀など、3丁ほどの小刀も置いてあった。カムイノミのあとの宴会では、偉い人たちがこの床の間の部屋に2列に向い合って座る(床の間と平行に)。

[山崎シゲ氏]

山側には、半紙版のガラスが6枚入る窓が二つあった。ヌサは、この2つの窓あたりにあった。

[山崎シゲ氏]

居間には、半紙版のガラスが9枚入る窓枠の6枚入った出窓だった。床の間の横にも窓があった。この窓が一番大事な窓だった。

[山崎シゲ氏]

西町のおばさんの面倒を2年間見て、今の家を継いだ。残された宝物は、村に寄付したので、今は、様似の郷土館にある。西町の家作りと岡田の家作りと似ている。先祖はアイヌだという人が今でも西町に多い。西町は、昔は、ウンベ（海辺）といていた。

[相川コト氏]

入り口が川の方を向いて、入口を入ると土間になっていて、土間が囲炉裏までつながっていた。障子があって8畳間くらいの居間で、隣が4畳間くらいの部屋でまごばあちゃんとわしらの部屋があって、奥にじいちゃんの6畳間、おじさん夫婦の部屋。土間の奥に流しがあった。

じいちゃんの寝ている6畳くらいの部屋にガラス窓があり、その窓から3間くらい離れてヌサがある。窓は、川の上流の方に向いている。神様に捧げるものを、その窓から出し入れしていた。じいちゃんの部屋には入っては行けなかった。部屋には、壁一面にむしろを立てかけその前にシントコなどが並び、刀も3つくらい掛けてあった。シントコ sintoko、ケマシペ kemaspe

の前には、太いイナウ（カムイエカシという名前だったかどうか思い出せない）があった。一抱えほどの小さなシントコに餅の切れ端を入れた（図14）。

[相川コト氏]

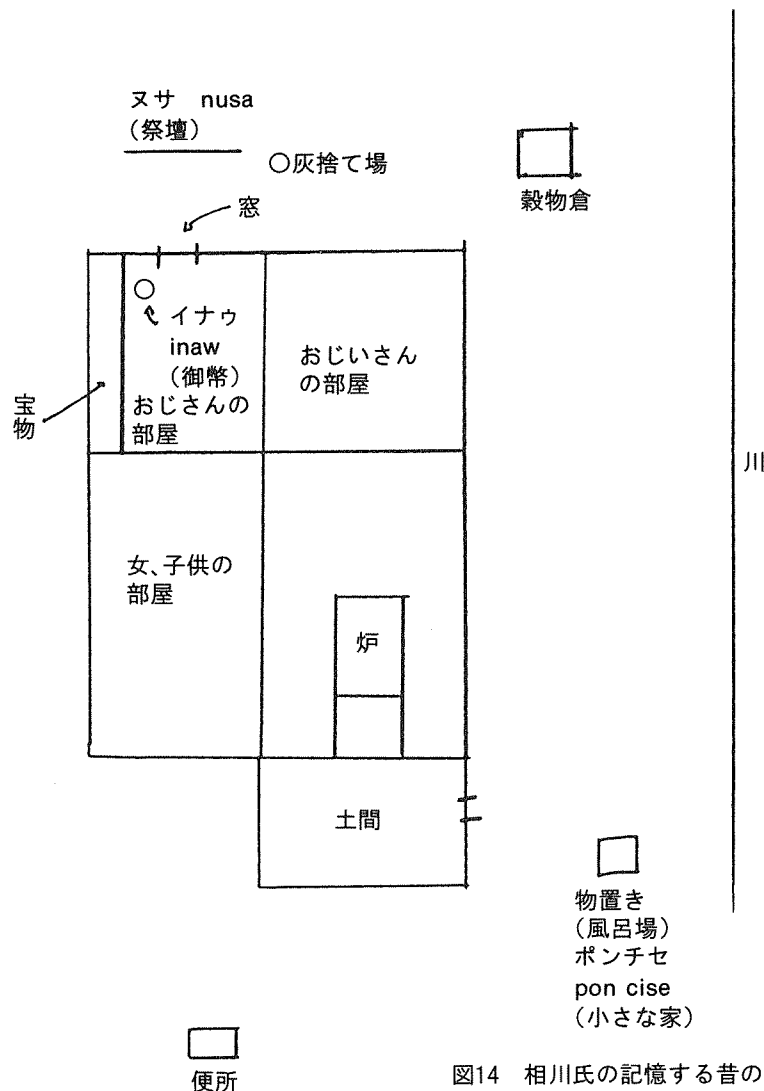


図14 相川氏の記憶する昔の様似の家(概念図)

シントコを置いてある壁には模様をついたござ(これもキナ kina という)がかけてある。

[相川コト氏]

自分の家は、障子と窓ガラスだったが、他の家で戸口にはむしろを下げていた。窓も板に紐がついていて開け閉めをした。煙を出す窓を空窓という。窓を開け閉めするのは、板に紐がついていてそれを引っ張ってスライドさせる。

[相川コト氏]

### 9-3-2. 炉とその周辺

鍋掛けは、2つあった。上手のは木製の鍋掛けで昔からの物らしく、真っ黒だった。喘息が出たとき、鍋掛けの煤のついた木を刃物で削ってコップに入れて飲まされた。じいちゃんはカムイノミする時、必ずそこに酒をやっていた。上手の炉縁木には、イナウが立ててあった。3本あった。もう一つは、下手にあり、鉄製の鍋掛けを日常の炊事に使う。

[相川コト氏]

炉には、上手に木の炉鉤があり、下手に鉄の炉鉤があった。日常の煮炊きには鉄の炉鉤を使ったが、カムイノミするときには、木の炉鉤を使う。祈るとき、炉内の上手に置いた3本の火の神のイナウにまず酒をささげ、つぎに木の炉鉤に酒をささげる。火の神のイナウは小さくて短いものだ。後に炉にストーブを置くようになってもイナウを立てていた。

[相川コト氏]

### 9-4. 屋外の構造

入口の向いに風呂場があった。草屋の風呂場をポンチセ pon cise といった。風呂場の入口は、母屋(チセ cise)の入口に向いている。便所は、土間の向こうに当たる。川下の方だ。川上の方には、ヒエ・アワを入れておく倉庫があった。母屋から一間くらい離れて、家の角から、少し上の方であった。いた。ヌサと並びになる。

高台にあった古い家には堀り井戸もあった。のちになって川の近くに引越した時には、川の水を使った。

[相川コト氏]

ヌサは、一列で、柳の木を刺すので、根がついたのか茂ってつぶれたようになって、暗くなっていた。いつも周りの草を刈ってきれいにしてきた。大きいイナウ、小さいイナウ、古いイナウ、新しいイナウがあった。ヌサのない家もあった。

[相川コト氏]

あく(灰)を捨てる場所は決まっていて、神窓側の右角より一間半くらい離れたところで、ヌサの右手にあたる。私の家では立ててなかったが、イナウを立ててある家もあった。

[相川コト氏]

昔の家は高台にあった。川から遠かったので、井戸を掘って水を柄杓ですくった。井戸には木枠がしてあり、イナウを立てて、その上に小屋がけしてあった。後に、川の近くに新しい家

を建てたが、川で水汲みした。バケツを2つ担ぎ棒で運んだ。昔の人は、川で洗濯してはいけないと言われた。井戸の神は何と呼ぶか分からない。「水」のことは、ワッカ wakka という。

[相川コト氏]